



TITLE:

<批評・紹介>傅衣凌著「明清農村
社會經濟」

AUTHOR(S):

森, 正夫

CITATION:

森, 正夫. <批評・紹介>傅衣凌著「明清農村社會經濟」. 東洋史研究
1962, 21(2): 226-241

ISSUE DATE:

1962-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152605>

RIGHT:

十五家爲閭」とするのとの二説について詳しく検討し、「百家爲四閭、閭二比」とある構成の骨格だけが、正確な構成の主張であるとす。ただ、この論文は、「滋賀大學學藝學部紀要」六・七號に掲載されたときの目次では、序論、第一節 黨族百家制の成立、第二節 元孝友上表の解釋、第三節 三長の任用と復夫、第四節 河清令と村落制、第五節 北齊の社會と村落制の意義、となつており、本書にはこの一二節のみが收録されているわけで、とくに第五節が缺けていることから、長いわりに餘り面白くない叙述となつてゐる。

以上、十二篇の論文、ほとんどが既發表のものであるが、それらは一九五三年から五九年にかけて發表され、内容はすべて北魏から唐にいたる間の貢舉制・考課制・村落制に關するもので、正史から丹念に史料を集めて書かれている。前近代社會の中國史はいかに把握されるべきか。その有力な手段として、(1)この國の歴史にタイプカルにみられる官僚制支配(賦役制をふくむ)に着目するやり方、(2)一般にその特性とされる家父長制への關心から個々の家―家族をとりあげるやり方、それに(3)國家權力と個々の家とを結ぶ接點に位置する村落・聚落制に焦點を合せるいき方が考えられる。これらの方法はそれぞれ舊中國の歴史を知る上に効果があり、たがいにあい補なうものであると思うが、この著者のばあい、(1)と(3)を採用しているといえよう。正に、慎重すぎると思われるほど丁寧にかかれており、その對象とされた時代が、これまで餘り開拓されていなかった分野であつたのも幸いして、ユニークな成果をあげられたといふことができる。

では、著者に注文すべきことはないのか。すでに幽明界を異にし

ていて著者には注文できないが、われわれ後進の者の戒めとして記すならば、まず、この書が單なる制度史におわつてしまつてゐるという不満を感じないわけにはいかぬということであり、史料が多く列擧されるのは親切ではあるが、冗長であつて通讀するのに骨がおれるという點である。

(瀧波 護)

明清農村社會經濟

傅 衣 凌 著

一九六一年十一月 北京
三聯書店 B6 一九二頁

本書は、傅氏によつて抗日戰爭の時期から最近に到るまでに執筆された、明清時代の中國農村社會經濟史に關する以下の六論文を收録する。

- I 明代徽州庄僕制度之側面的研究
- II 明清時代永安農村的社會經濟關係
- III 清代永安農村賠田約的研究
- IV 閩清民間佃的零拾
- V 明清之際的奴變と和佃農解放運動
- VI 明清時代福建佃農風潮考證

後 記

本書の基礎となつたのは、一九四四年、福建協和大學(現福州大學)中國文化研究會刊行にかかる單行本シリーズ「文史叢刊」の一冊として傅氏が發表した「福建佃農經濟史叢考」であり、II、III、VI論文の原型を含む。他の各篇は、解放後の著作であり、第一論

文が「文物」一九六〇年二號に發表されたもの他は、はじめての作品である。なお、上記「叢考」については、田中正俊氏が「戦時中の福建郷土史研究Ⅰ・Ⅱ」（歴史學研究一五八、一六一）で、山根幸夫氏が「福建省永安縣の土地關係文書について」（史學雜誌六二の六）で、すでに詳細に紹介の勞をとられている。

傅氏の後記によると、本書の内容は、基本的には、農村社會經濟構成に關する部分（Ⅰ―Ⅳ、主として民間の原文書に依據）と、階級闘争に關する部分（Ⅴ―Ⅳ、主として地方志に依據）とに大別される。傅氏にこの二つのテーマを長年月にわたつて追求させた問題意識は、科學的中國史學自體が、解放の前後にわたつて、になつて來たものといえよう。すなわち、一つは、あの「中國社會史論戰」以後、半封建・半植民地化がますます進行していく現状を嘲笑するかのよう唱えられていた「秦漢以後の中國が封建社會の範疇には屬さず、すでにこの期の中國には農奴制は存在しなかつた」という一連の見解に對する深い疑問である。また一つは、帝國主義の侵略を排除し、それに依據する半封建的勢力を打倒した解放戦争の勝利の後、人民民主主義革命の一層の深化による社會主義建設の必要に當面した中國人民の切實な要求——自己のはてしなく長かつた革命への歴史的過程を、世界史の發展段階の上で、正しく法則的に評價しようとするその要求に應じて發生した資本主義萌芽論争が、傅氏に與えた、上記二つのテーマに對する新らしい視野、すなわち「封建後期」の諸特徴の發見である。

このような問題提起を實踐していくに際し、傅氏は、大量の資料を占有し、マルクス・レーニン主義の科學分析を行なうことが歴史

研究の發端であるとし、この方面における近年の中國史學界の少なからざる作業、とりわけ、社會經濟史研究の分野で民間記録の探索蒐集が人々の重視を引き起していることを紹介する。そして、本書の一定部分は、傅氏が一九三九年夏、福建省永安縣黃歷郷で發見した數百枚から最近の發見・所見にかかるまでのおびただしい「民間文約」を排列、類輯することによつて成立する。「本書所收の諸論文の執筆にあたり、より多くの史料を提供し、研究の進行に便利をはかる」と、もともと、中國農村社會經濟史の「長編」（資料集の意）としたため、頗ぶる史料の堆積の嫌いがあり、引用に際して客觀主義的傾向を免れていない」とは、著者の謙辭であるが、同時に、氏の理想とする歴史研究の方法と、本書の特質をうかがうに足ることばといえよう。本書から私たちが身を低くして學ばねばならない點は、氏の粘り強い原則的な問題の立て方とともに、民間記録に對する激しい情熱であろう。一九五二年、上述の紹介論文で、田中氏がすでに適確にのべているように、大學自體の移轉疎開すら餘儀なくされた傅氏ら福建協和大學の研究者は、「抗日戰の抵抗の中で現地の原史料を用い、郷土の歴史を甦らせようとした」そして「彼らの意圖は、從來中國のアカデミックな歴史學界に往々見られた二次的史料に基いて抽象論を展開する學風から〔自からを〕脱却せしめ、彼らの研究を著しく具體的にした。その具體的事實の蒐集發掘は、彼ら自身がその中に生きていた歴史的現實によつて齎らされたものであり、かくして『中華民國』の歴史『學界』もまた自らの前進と變革とを経験した」のである。田中氏が「彼ら」——中國人民に與えた評價のことばは、今や中國人民によつて對自化され、私た

ちに根本的な反省を要求するメスとなつてはねかえつて來ている。

本書は田中氏らが紹介された抗日戦中の發掘になる原文書ばかりではなく、IV、VIにみられるように、解放後の調査活動によつて發掘された新たな文書はじめ、私たちにとつて全く未知の存在であつた中國科學院、文化部文物局所藏の文書を紹介するが、このことは今後中國各地における意識的な作業によつて多種多様な原文書が發掘される可能性を示唆し、「生きた中國」を離れて中國史學はあり得ぬという嚴肅な事實に私たちの想いを到させる。なお、地方志からの資料蒐集は、民間の所謂原文書類發掘の作業と性質を一應異にするが、著者たちが抗日戦中の抵抗の中で新しい歴史學を打ち樹てようとした過程があつて、はじめてこのように重點的に行なわれたものであることを、銘記すべきであらう。

I、「明代の奴僕は佃農と相異點を持ちつつも、ともに嚴重な封建的壓迫を受けており、實質的には農奴制の範疇に屬する」という著者の見解を、奴僕制の普及發達が顯著であつた當代の中國各地の中でも、商業資本の發達によつてとくにそれが盛んに行なわれていた安徽省徽州府の「民間文約」二十篇（中國科學院歷史研究所、文化部文物局所藏）の分析によつて具體化しようと試みたものである。徽州の庄僕制度としてあらわれる奴僕の原因は、勿論中國地主階級の經濟的壓迫の結果であるが、文書に鮮明に具體化された形成過程は、1、地主の田地を耕種することによつて、租米納入の外、役を承け、たもの、2、地主の庄屋に住居し又地主の山地に埋葬を行なつた關係で各項の勞役を負担しなければならなくなつたもの、3、養子となつて結婚したため、地主の爲に無償の勞役を負担すること

になつたもの（仁井田陞・明末徽州の庄僕制——とくにその勞役婚について——和田博士古稀記念論叢）は、傅氏のこの論文に依據した作品である。4、負債のため子孫を地主に抵當として出したもの、の四コースである。この四つのコースが抽出されて來た諸文約には、地主階級が、封建的族權のカムフラージュの下に、農民をしつかりと土地に緊縛して勞働力の獲得を保證しようとし、彼らに對して父祖の棺木の埋葬、家族の一脈の香祀の延續を理由に極めて苛酷な勞働條件を甘受させていた過程が、はつきり示される。注目すべきは、この種の農民が、文約に畫押するとき、單に各房長だけでなく、各房下の子孫も含めて同族がまると參加し、父子祖孫が相繼いで服従するようになることである。「甚しきは兩姓の丁戸村庄相等しくして、此姓、彼の姓の爲に執役し、奴隸の如き有るに至る」（皇朝文獻通考・卷一九・戸口一）という現象は、このようにして造成される。また、地主の庄僕支配は、その子女ばかりでなく、遺妻にさえ及ぶ。さらに、地主は、「郷族」（地方同族）勢力の牢固たる存在を農民統治の有力な手段としており、その結果、「宗祠・神會」の活動はこの地方の社會生活の重要な部分を構成していた。奴僕はこの活動における各種の勞役にも役使され、嚴しい監督を受けた。かくして明代徽州の庄僕は、封建地主の壓迫の下に悲惨な生活を送つたが、彼らは「古代」の奴隸でないばかりか、まさに資本主義生産の萌芽要素が出現した封建社會後期にあつて、自己の「力金・田土・屋宇」に一定の支配權を持ち、子への均分をも認められていた。「力金」とは當地方の農民が土地を耕種し勞働力を提供することによつて收得した、占有・承襲・出賣することのできる一種の物

權であり、主として山地における植樹造林の勞働に對して與えられるが、その——力室——の——多寡によつて收穫物の分量が定分されるという特異な性格を持つ。このようにして自己の私的經濟の獨立性を發展させていた庄僕の中には、占有した土地を佃作させて租をとるものさへある。そして獨立した小生産者としての經濟的發展にとつてこそ、自己を庄僕という身分にしばりつける封建勞役制の存在は非常な桎梏であり、ここに封建的身分秩序打破への切實な要求が生まれる。庄僕の服役規定不履行に關する文書の常時出現、さらに、明清交代期における東南各省の佃農解放運動の發展と各地奴僕の「群起響應」にあたつて、ここ徽州に大規模な奴僕解放運動が引き起されたのも、「火を積薪に厝(お)いて其の上に寝る」ような形勢のしからしめたものである。

II、福建省永安縣は、かの正統十三年(一四四八)の鄧茂七の起義の後、その發生地たる沙・尤溪兩縣の一部を割いて作られたという、歴史的に重要な意義ある場所である。一九三九年夏、著者が同縣黃歷郷で發見した百篇餘の契約文書がとくに注目される所以である。うち、非常に多くを占める農村經濟關係の文書は、明の嘉靖年間から清の光緒年間に及んでおり、八田地の典當・賣買契約が最も多く、次は八佃約であり、八金錢借貸字據から八分家合約まで、あるべきものはことごとくあるといわれ、他に二冊の八流水簿があつて歷年の錢穀の出入及び物價の情況が記載されている。これらの文書を1、八地權の移轉と地價、2、八租佃關係、3、八借貸情形の三項目に整理し解説を付したのが本論文の内容である。1、では、著者の發見した多くの契約が、馮氏という一姓のも

のであること(一九三九年頃の該郷の住民は馮姓が最も多く、鄭姓がこれにつぐ)、堡を築き族を聚めて集團的に居住していた彼ら之間にも高利貸資本の活動によつて分化がおこり、従つて土地の兼併が、この血族集居の村落の中でもかなり盛んに行なわれていたことがまず明らかにされる。地權の移轉は、大體、第一に典當、次に找盡(湊・補)。(買入れ主の第二次請求・找は足らざるを補なうの意)の段階を経て、買斷(買却)される。田地の典當と找盡とは、一回かぎりの買斷に比べ、買主にとつてより有利であり、従つて彼らは常にこの方式をとつて田産を蓄積する。ここに高利貸資本の中國農村における侵蝕作用が見出される。しかもこの奇妙な賣買は、彼らの間が、社會的條件と自然經濟の制限によつて、封鎖的自給自足的社會經濟單位として保持されていたために、多かれ少なかれ、この血族の内部で行なわれている。黃歷村(郷)の土地賣買契約から十六篇を選んで作製された表によれば、一目了然、この一村の地權の移轉が、宗族でなければ姻戚であることを理解できる。著者は、この現象を、中國農村社會の「大族が小族を統轄し、強房が弱房を統攝する」原理と符號するものとし、この氏族制の「産は戸を出でず」という遺制、所謂「先に房親伯叔を盡し、次に鄰人を盡す」習慣は、中國歴代の地方豪族がその特殊な勢力を保持し得る基礎となつてゐることを指摘する。この一點に中國農村社會經濟組織の秘密があるという著者の見通しは、いくら尊重してもしすぎることはないであらう。この項には、他に、黃歷村田地賣價表(一五五二—一八六五年)、黃歷村田地典價表(一七七五—一八〇三年)があり、この一連の文書に頻出する田一段という單位と

單位あたり收穫量が明らかにされたときには、定量的な問題の分析にも資するところあろう。2、では、鄧茂七の亂の主要なテーマであつた「冬牲（附加租の一種）」と「送粟（租米の輸送勞働）」の負擔、とくに前者が、亂の發生したここ永安で後代の嘉靖から道光にかけ、いぜんとして佃農に課せられている實態が生資料で示される。（一本杉玲子・冬牲・史論1参照）もつとも、これより以後、これら附加租乃至副租は、正租の中に合併され、これがまた近代中國各地の高額佃租を構成する要件の一つとなつたというのが、著者の一つの推定である。高額の佃租、稻穀一種への品種統制など、地主から課せられる佃農の封建的負擔の内容が如實に示されるところにも、木版の契約文書にも彫り込まれた十年間という耕作期限の普遍化、佃戸との血縁關係乃至「會」（錢會という對人信用による農村金融）でのつながり故に、地主の撤佃が容易でなかつた、等々と興味深い事實も抽出される。3、にもこの「中世」の農村の中で、農民が資金の融通を受けるのはただ地主からだけであつたこと、又、そこでは收穫物による償還（借錢還數）が多く、抵當としては「小租」「小租田」（Ⅲ参照）が用いられていたことなどの注意すべき指摘が含まれる。

Ⅲ、永安縣黃歷郷で發見された契約文書には、所謂「賠田約」なるものが非常に多く、地方志を中心とする參考資料を媒體にして、この「賠田」が、一田三主、一田四主、慣行下の現象であると思當をつけた著者は、この種文書の紹介と分析を本論文で試みる。なお、すでに第二論文にもその見解の一端は示されている。賠田とは一種の佃權であり、その所有主たる賠主とは、直接生産者と地主の

間の中間層的人物である。この佃權の成立は、まさに中國封建制の内在法則から説明すべきである。1、中國封建制下の停滞した生産力の下では、集約的方法によつて限られた一定の領土と人口の範圍内で生産物總量の増加を計ることが出来なかつた。従つて政治的擴大すなわち占領地域の外延の擴大によつてのみ生産物總量の増加が可能であり、占領地域の領土擴大には深い注意が拂われた。東晉に始まり、唐宋を経て近代に到る迄の福建開發の中で次第に南へと移動した中原の移民は、その政治上の優越した地位によつて大量の土地を所有した。彼らは大部分の所有地を原住民を利用して開墾耕種させねばならず、一般の地主は仕事の手を確保するため農民を土地に附着させようとしたが、後期封建社會にあつては、單純に、政治的・強力的占有方式を使用し得ず、債務隸屬方式をもち、金錢を借し與え、あるいは永佃權を與えて自由に移動できないようにした。従つて、佃權の成立には、直接生産者である農民が、彼の投下した「資財」と「勢力」、これによつて増加した生産量などの見返りに獲得したところの「耕作權」として、農民に利益を與えるという側面と、封建地主の農民統治の道具であるという側面との、二重の要因が同時に作用する。2、さらに佃權（著者は佃權と永佃權とを同義語として用いるようである）の發達を促がした二つの理由がある。一つは生活の貧困と高額租税、高利貸資本の侵蝕によつて苦しむ「小所有地農民」が、免税あるいは減税のため、土地を豪強に詭寄・托庇し、小額の錢數を納めて自からその佃戸となり、その耕作權のみを手もとに保留した場合である。3、一つは封建經濟支配下の農民が勞働力の過剰を解決するに由なく、多數が一定の土

地に集中して耕作權を爭奪する現象が生じ、**糞土銀**、**流退錢**、

などを支拂つて、有償でそれを獲得する場合である。以上1-3による耕作權の分立獨立が、年月の経過するにつれ福建の地權（土地所有）關係と租佃制度上に、ようやく一種の中間層的人物を發生させ、一田數主という特殊現象を形成させた。なお、著者は、宮崎市定氏の説（『中國近世の農民暴動』・東洋史研究・10の1）に發展的解释を加えて賛成し、中國における永佃權の出現は非常に古いが、それを強固にし普遍的にしたのは、鄧茂七の起義等の階級闘争と直接の關係があるとする。要するに一田三主制の形成に至る迄の發展の道筋は多種多様であるべきである、それは中國封建後期の特殊な產物であり、いくつかの「獨立農民」の土地權爭奪の願望を反映し、また中國資本主義萌芽要素の發展の未成熟を反映している、従つて一田三主制の形態もまた非常に複雑である、と著者は一旦總括する。（著者の形態分類は、史學雜誌・63の7・清水泰次・「明代福建の農家經濟―特に一田三主の慣行について―」に依據する）

このような設定をもとに、まず三つの「**賠田約**」が分析され、そこで賣買の對象になつてゐるのが、地權ではなくて、一種の耕作權であり、著者のいう佃權としての「**小租**」であることが明らかにされる。この「**小租**」の成立については、上記1・3の場合がそのまゝ、これらの文書の上で檢出される。「**小租**」が、獨立の物權として、轉讓・典當・賣買されるからには、その子孫への分給を示す文書があるのも當然であろう。そして「**小租主**」がまったく地主と同様に佃戸と契約を結んで高額の佃租を徴収する事實も檢出されている。つづいて△典小租▽△當小租▽△賣小租▽の具體例が文書に

よつて指示される。ここでは、「**小租**」を典質し耕作權のみを保有して無所有となつた佃戸が、典主に對し穀物あるいは錢で利息を納入している狀況も指摘されている。この場合には、「從來の小租」が利益權的な「新しい小租」と耕作權とに分解したものと考えられよう。又「**小租**」の賣買にも「典質」・「找補（盡・湊）」の二過程が發見され、著者はこれをまさに高利貸資本が中國後期封建社會を侵蝕していつた結果だと判斷する。なお「**小租**」の轉讓が契約される時現個人も参加すること、一般に典當・賣買の時「**小租**」は常に「**正租**」よりも高額でその數倍をこすことなどは、重要な分析といえよう。なお、著者の主張する「**賠田**と**小租**」の關係は、多くの文書上で密接なものがあるが、「**苗田**と**小租**」、「**賠田**と**正租**のみ」の組み合わせも見出されており、「**賠田**」「**小租**」に對する著者の概念規定はなお不十分な點が多い。

中國における獨立自營農民の發展にとつて、この耕作權の取得は、積極的な進歩作用を起すことが出来なかつた。かえつて、封建勢力の常なる壓迫と工業の農業經營方式に對する影響の微弱故に、「**小租**」を獲得した「**小租主**」（**賠主**）は農業の經營からはなれ、坐して高額の田租を收めるようになる。このような狀況は直接生産者たる佃農の重い負擔を増加し、不合理な租佃關係を造成して農村の生産力を萎縮させる。中國農村のこの「**小租主**」なる中間層的人物の造成は、正に新しいものと古いものとが闘争する中國封建經濟の特徴である―というのが著者の結論である。

IV、一九五八年秋、福建師範學院歷史系地方志研究室が探索蒐集したおびただしい民間の各種の契約文書から、福州府屬閩清縣發見

にかかり、いずれも清朝の順治から道光年間にかけての租佃關係を示す數篇を選んで考察を加えたものを内容とする。1、契約の形式には三つの型、すなわち、佃戸が地主に對して承耕（耕作を請け負う）する時立てる「承佃約」、地主が土地を佃戸に交付して承耕させる時佃戸に給する「安佃約」、佃戸の租額完納證明書たる「佃戸執照」の三つがある。2、文書上に「福城林衙」「福城王衙」「鄭衙」等の表現がしばしば見られることから、閩清において自己の租米の倉庫をもつ福州府在城の不在地主の土地所有の多かつたことが分析される。3、閩清縣佃農の負擔は、正租・附加租を通じて一般に重い。さらに佃農の負擔の強度が増したのは、福建農村の一田三主制の一タイプとして、佃戸の中から「根主」と「佃戸」との分離が出現したからである。たとえば、順治二年の「立賣田根契」によると、「用に乏しくなつた」という理由で「己のが物業に係る」、すなわち獨立の物件としての「田根」が出賣されている。同時代資料の「貧佃賃を掲て償うなく、田禾を指して歲歲輸納せんと、名づけて田根という、根主粟を得ること業主と同じくして、實に苗糧の苦しみなし」（陳益祥「采芝堂文集」）という記述は、一見、田根があたかも高利貸から起つたことを示すようであるが、實際上、佃農が「田禾を指して歲歲輸納」し得たのは、彼らが土地に對してすでに耕作權をもつていたからである。しかし、Ⅲの「小租」と同様の性質を擔つたこの「田根」も、前者の場合のように、獨立自營農民の成長を促す耕作權の成立という側面をもちながら、當時の歴史的條件の下にあつて、直接生産者に對して搾取を進行するため、すなわち租米を徵收する道具と化する地主的な道と、直接生産

者によつて出賣され無産の貧農に淪落するきつかけを作る道と、この二方向にしか發展できなかった。4、佃農の耕作年限については、定量的に明確な規定がない。年限は比較的長かつたと思はれるが、これは實際上必らずしも佃農にとつて有利な條件でなく、むしろ地主階級から永久的に隷屬搾取される條件であつたと考えられる。

V、「佃農と奴僕とは、明末清初、中國農村の主要な勞働力であつた。當時の商品經濟の初歩的發展は、獨立自營農民」（原文は、獨立的自耕農民）の成長をもたらしした。しかしこの農民層の分解は、極めて困難な環境の中で進行した。とりわけ中國の專制封建政府は、地主の統治を強固にするため、各方面から都市の手工業の發展を制限する。このように商品經濟の發展は決して農民の解放を促進することができず、かえつて郷居地主と不在地主とに更に多く商業資本と高利貸資本を利用して農民を搾取させ、農村内部の封建的關係をいつそう固め、佃農の生活水準を長期にわたつて奴隸制の邊緣（ふち）に瀕せしめた。この情況は、おのずから、すでに封建制度の沒落段階の明清時代にある農民の封建的束縛に反對し自己の獨立經濟を發展させようとする切實な要求と、正に相抵觸するものだつた。このようにして、彼らは非常に自然に聯合し、一致して行動し封建地主に反對して轟々烈々たる解放運動を引きおこした。1）1881年明末清初の中國農村社會關係についての新しい評價は右のように總括される。長江中下流及び東南沿海地方を中心に展開された、明清交代期における、奴變と佃農の解放運動を、以上のような問題設定に立つて分析したのが、この85頁に及ぶ大作である。1については、本論文の他の部分についてもそうであるが、とくに著者傅氏の「明代

江南市民經濟試探」(明清時代商人及商業資本)をはじめ氏自身の勞作の成果が立論を支えている。2では八明清交代期における長江中下流、東南沿海地方における「奴變」と佃農解放運動の展開過程が、地方志を主體として蒐集された莫大な資料を整理、驅使して描かれる。この解放運動は、三つの地區に分類される。「一」蘇州を中心とする江南地區では、明末崇禎四年(一六三一)以來、抗租・搶米の暴動(原文は風潮)が都市農村をとわず、みな一様に出現し、その後、北方農民軍の勝利、封建明朝の崩潰とともに、規模巨大な奴變暴動が爆發する。この地區の運動は、奴僕が主體であり、同時に佃戸及びその他の勞働人民の参加がある。「二」長江中下流の湖廣地區では、崇禎十六年(一六四二)、張獻忠起義軍の影響の下に、黃州府屬麻城縣の奴僕がまず起つて響應し、大量の人数を里仁會等の組織に結集し、封建搾取者に對して自己を解放する闘争を開始する。これをきっかけに清代初年に至るまで、この奴僕解放運動は繼續する。従つて、この地區では、奴僕の起義を運動の中堅とする。

〔三〕江西・福建・廣東・浙江等省の隣接地區の解放運動は、奴僕と佃農兩者の緊密な結合を特徴とするが主體は佃農である。この廣大な地域の運動は、さらに、a、福建、浙江、廣東沿海の租斗(小作料の量器の規格)に反對し自由を爭う闘争、b、當時の農民運動の主流である福建、江西、浙江、廣東四省丘陵地區の佃農解放運動、c、廣東地區の「奴變」暴動の三系統に分たれる。aの沿海地區における海外貿易の進展と「商業資本」のある程度發展、b地區における工業原料となる「商品作物」の種植事業の發達、c地區における對外貿易、「商業都市」の出現等に現象する「商品生

産」の發達が、その成果を自分の側につみとらうとする地主階級の搾取と壓迫を強化し、農民は廣大な地域にわたつて極めて激烈な反抗運動を行なう。3では八明清交代期における「奴變」と佃農解放運動の闘争スローガンとその組織形式が分析される。2、に提示された諸資料によつて、生動する農民闘争の具體像を與えられた私たちは、その際、著者の指摘するように、明清交代期における「奴變」と佃農解放運動の活動地域が非常に廣範圍にわたり、その闘争の形式が合法闘争から武裝闘争に至るまで、多種多様であり、かつ闘争の期間も五・六十年の久しきにわたるものがある、ことを見出す。その主要な理由は、この運動が中國封建社會の後期に位置したため、農民のスローガンと組織形式が以前に比べて非常に大きく進歩し、徐々に迷信のパーセンテージを除去して、明確に均田、免賦、自己解放と獨立經濟の發展を要求する願望を提出し、これが無數の農民を鼓舞して封建主義に對し無情の闘争を展開させたこと、にある。李自成、張獻忠起義軍の「均田・免賦」のスローガンばかりでなく、佃農制の發達、資本主義萌芽要素出現の影響の下、この地方の農民の地主に對する階級闘争は、その固有の特徴をもつ。すなわち小生産者の傾向が、より顯著である。これを概括的にいえば、「封建的束縛からの解放と自由な個別經營の樹立」が要求されている。農民のこのような要求を表現した闘争スローガンの内容は三大別される。「一」身分の自由をからとる闘争、「二」平倉・平穀(ともに搶米すなわち米騒動の表象であり打米ともいう)と地租の増加に反對する闘争、地租再分配の主張(a、斗量制度の合理化、b、額外加租反對、c、封建貢納反對、d、封建徭役反對、

e、「賦が除かれたのだから、租も捐（のぞ）かれる」という説の提唱）、「(三) 土地を再分配する、すなわち、ここ南方では永佃權の爭取として實現する闘争。ところで、當時の歴史的條件に規制されて「國家制度の改變」を要求し得なかつた農民の暴動は畢竟、自發的な群衆暴動であるが、農民は地主階級と闘争を進行する中で、少なからざる戦闘經驗を學び、さらに封建社會後期、資本主義の萌芽がすでに存在しているという状況の下で、若干の都市の闘争の經驗を吸収し、自己の組織をもち、自己の戦闘機構を建立した。組織形式の三つの相異なつた側面の抽出は著者によつてそのまま分類の方法とされる。「(一) 群衆の組織（農民大衆自身の中に建立された彼ら自身の組織）」、「(二) 軍事的組織」、「(三) 政權的組織（進歩的政權ではないが、闘争中樹立された農民の利益を代表する權力機構）がそれである。

VI、この抗日戦中の作品を骨格とする勞作は、著者が當時常に翻讀していた福建の地方志（寺廟志をも含む）から得た印象、すなわち「明清時代のこの地に無數の佃農大暴動が不斷に爆發していたという深刻な自覺」にもとづいている。この暴動の性格、同時にその前提としての當代福建農村の社會關係、農民生活の如何がここで追求される。1、問題點の一つは、顯著な土地集中、不在地主制の發達、士大夫・寺院・郷族という三大所有主體の存在、集中過程における強制的占有・農民の投獻・高利貸的侵蝕という三コース、その中でとくに第三の場合の優勢、等々、大土地所有のあり方の特徴にある。とりわけ義田、祠田、族田、廟田、學田、茶田等の郷族（地方有力豪族の同族結合にもとづく）共有地の存在が封建制を維持する

一つのテコとして強調される。2、土地集中の盾の半面として、土地から排除された農民の大部分は「一、二段」の零細な土地を佃耕し、高額の佃租を負担する佃農となるが、そこで注目されるのが、山を租（か）りて造林し、箐・茶・菰を種植する箐客・棚民と、浙江・廣東の山區や江西内部に出かせぎにいく所謂闖佃の存在である。3、これら福建の無所有農民に佃農は、土地と負債とを媒介として、地主によつて身分的隸屬關係に置かれ、種々の經濟外強制を受ける。「佃頭・糞土・認佃・根租」等の名目による契約保障金の徴收。封建的貢納、たとえばその典型としての「冬牲」「芋」「掃箐」「豆粿」、徴租にくる地主への「酒席の供應」。租米の輸送、軍役等の勞役義務。そしてこの強制の一つのあらわれとして、とくに注目すべきは、「郷斗・郷租・郷例」の名稱で資料にのこる度量衡の紊亂と不統一である。單に統一的國內市場の形成を不可能ならしめた側面ばかりでなく、實際上、封建支配層に、農民に對する額外收取を容易に行わしめる手段を與えた側面を重視すべきである。4、福建の佃農は、以上のような封建的束縛に對抗するために、そして封建後期の農民として強烈に剩餘生産物の再分配と自己の個別經濟發展を要求して大小の規模で多くの反抗運動を展開する。運動は、三つに類型化して叙述される。「(一) 封建貢納と勞役により起されたもの。IIでふれた鄧茂七の起義、天順六年（一四六二）の李宗政の起義、成化二十三年（一四八七）の邱錦等の起義が紹介される。「(二) 量器の紛糾によつて引き起された暴動。明清兩代にあつては、この類型のものもつとも多い。較秤斗・較正斗栳・平斛・較桶・較斗・較斗減租、等のスローガンをかけ、斗栳會・斗頭、などと

その組織にも量器の名稱をかかげてたかわれた闘争は、明清交代期には福建全土に波及し、その一部は隣接江西農民軍との統一行動を伴なつた抗清戦争にまで發展する。「三」封建後期の農民の諸要求に對し、搾取を強化することによつて應じる地主階級に、小生産者としての農民は自身に特徴的な平均主義的思想にもついた。平倉・平米・平穀、というスローガンの下、いわば、打ちこわしの米騒動的行動を對置する。「四」福建に特徴的な山地を耕種する佃農たる善客も藍錠の交易が順調でなくなると、掠奪的暴動を起す。反丈量、抗租等の起義もまた展開されている。

冒頭に紹介した著者の問題意識——1、地主と佃戸の關係は「契約的」であつて、「身分的隸屬」ではない、という考え方はあやまりであり、秦漢以後、近代に至るまでの中國では封建的社會經濟關係が支配する。2、明清時代の中國社會はすでに封建後期に屬し、資本主義生産の萌芽要素が微弱ながらも嚴として存在しており、この期の經濟發展を前期と異ならせるとともに、農民闘争の性質に變化を與えている——は、以上の各篇を通じて一貫して打ち出され、中國封建社會の特質を示唆する豊富な問題點を提供している。

著者は、この各篇を本書に收録する作業の中で、また、一貫して、明清時代の社會關係を依然として規定している、地主階級の經濟外的強制の體系を、打ち破る（「と著者が期待する」）動き、すなわち、中國農業における資本主義的關係の發展過程を重要な關心とする。これは上述した問題意識の發展と深化に他ならない。ここでまずそのような關心を私たちの總括の手がかりとして追おう。

著者の結論に従えば、右の過程は挫折し内訌していく過程であつ

た。すなわち、農民は自からの生産勞動と階級闘争の成果として耕作權を確立した。けれども、この耕作權は、獨立自營農民の自由な分割地所有に轉化せず、従つて、中國の農村においては、農業企業家と農村プロレタリアートへの兩極分解への道はとざされた。それは何故か。要約で紹介してきたように、さまざまの現象形態をとる「封建勢力」の壓迫、その影響下に、都市の手工業を主體とする「資本主義萌芽要素」は「微弱」であり、その發展は「緩慢」であつて「直線上昇的」ではない。従つて、農民の獲得した勝利の果實は、農民のもつて生産を擴大、發展させるために用いられる條件をもたず、生産を遊離した「中間層」の手に蓄積され、彼らによつて農民に對する高利貸的・地主的收奪の酵母に轉化される。同様に、この果實は、「封建勢力」の中核たる地主によつて、獲得したその當初から、農民を土地に束縛する手段としての性質をも擔わされている。このようにして、著者の設定する中國封建社會の主要矛盾、地主と農民との矛盾は、解決されないうちに、ますます内訌して深刻化する。

このように、農業における資本主義的關係の萌芽は挫折するが、しかし、手工業における萌芽の存在と相俟つて、明清交代期の農民の階級闘争に影響を與え、それをより合目的・組織化し、清初において經濟外強制的體系を一定程度弛緩させる。

資本主義の西歐における發達の過程を無媒介的に比較の對象とすること自体に疑問があるが、それには今立ち入つては觸れないとして、地主と農民との矛盾はどんどん内訌し、新舊兩勢力は相いたたかいつつも、「新らしいもの」が成長していかないうちに、「古いも

の」がその上を壓迫する——(五九頁) という著者の見通しを私は基本的に支持したい。しかし、著者の方法では、中國近代史において帝國主義の侵入を許した、しかしまたそれを不完全なものに阻止しえた中國社會の歴史のもつ特殊な契機として、この「内訌」を、又そのような契機を導き出した農民の弱さと強さを評價することができないように思われる。

以下、著者の提起した豊富な問題點の中から、三つを選んで考えてみよう。なお、I、Vに記された、奴隸的なものの存在形態、Vの多くの資料が語る、農民闘争における主體の連合のあり方、(都市の貧民と奴僕と佃戸、貧民の亂に乗じた豪奴と悍僕、都市の巨族の一部と佃戸、地方衙門の役人層と佃戸等々)、その他いくつかの注目すべき問題は割愛せざるを得なかった。

〔一〕I―IVの原文書に依據した諸論文で著者が提示する多くの問題のうち、とくに私たちの關心をひくのは、力笠(I)、賠田・小租(II・III)、田根(IV)という名稱で資料に表われ、耕作權と密接なかわりを持つところの獨立の物權の性格である。著者は、一貫して、直接生産者たる農民の「勞力と資財」の投下に對して與えられた耕作權の成立を、右のような名稱をもつ諸權利の獨立、分立の前提として重視する。すなわち、それらの原型を、農民の耕作權の保障・獨立自營農民の成長に對して積極的な意義をもつものと評價しようというのである。「このような耕作權(著者の理解によれば永佃權と同義)の存在は疑いもなく地主階級の收入に對して損害を與えたばかりか、更に重大なことはそれによつて地主階級の土地獨占權が侵犯されたことである。」と著者は強調する。宮崎市定氏の

見解を引いて、佃農の階級闘争を、この耕作權成立の促進條件とするのも、そのような評價の反映に他ならない。私たちは、そこに、凡ゆる粉飾を拂いのけて、封建社會後期という發展段階を措定し、未成熟ながらも資本主義萌芽要素の存在を確認しようとする著者の問題意識、直接生産者に對する鋭い感覺と愛情をうかがうことができる。この著者にはじめて「力笠」の意義が着目され、又「田根」は高利貸付けによつて生まれたのではなく一種の耕作權として先ず成立していたことが明らかにされ得たのである。明清交代期、福建の寧化・江西の石城の起義に應じた江西瑞金の張勝ら首唱による起義は「八郷均田」をスローガンとした(本書Vに引用)。その内容は乾隆瑞金縣志の作者により「之を均しくすると云う者(は)、田主の田を三分し、一分を以て佃人耕田之本と爲さんとす。其の耕やす所の田、田主姓を易うるあるも而かも佃夫人を易うるなく、永く世業と爲さん」と説明されるが、この地方志に見る農民の要求と以上のような著者の積極的評價とは全く一致している。

しかしながら、II・III・IVの典當・賣買の諸文書は、著者の一字々々(賠頭穀田・耕作賠田・作水等々)を拾い出した苦心の解釋にもかかわらず、永安の「賠田」・閩清の「田根」を「一係農民在開墾時、賠下許多的本錢與勞力、因而增加生產、不久、這逾量生產的權利、漸爲佃戶所有、而得到地主的承認」というものとしては示さない。むしろそこでは、文書の性質からして當然とはいえ、「小租を伴なう賠田」「小租そのもの」「田根」が典當・賣買の對象となつて農村内部の金融のなかで流通していく過程がまざまざと現出される。従つて、耕作權の確立を説く著者の見通しが私たちに教えると

ころ多いとしても、その實證には、なお多くの関連諸資料の裏付けを待たねばならない。これらの文書からは、直接的に佃權の成立過程の抽出を試みるよりも、むしろ、乾隆十二年二月の一つの「當約」上に同時に記されている「正租・小租・賠田權」という諸權利各々の機能と相互關係、農村における金融關係の具體像と特質などのテーマがもつと文書そのものに即して深く追求さるべきであろう。著者もそれを企圖してはいるが、今の段階では文書の分類整理にとどまつている。（これは本書における文書の操作の仕方一般に通じていえることであるが。）そして、このような作業を経て、はじめて、著者が耕作權の確立とともに強調した、しかし全く具體的には深められなかつた課題、すなわち、この物權として獨立してくる耕作權を集積し、その集積に寄生して第二の徵租者となる「中間層的人物」小租主の存在も正しく把握し得るであろう。

なお、著者がⅢで、中間層的存在を示すために引く漳州府關係の五地方志からの引用資料にある「小税（租）主、業主、税主」等の名稱の持主は、それら資料自體、さらにこれを用いて行なわれた仁井田陞氏（明清時代の一田兩主慣習とその成立・中國法制史研究所收）、清水泰次氏（既引）の研究によると、荒廢地を廣く占據した土地の所有者であり、その小租主と、それから税役の負擔を條件に徵租權を有償的に獲得した大租主、小租主に糞土銀を拂つて土地の永續の利用權を取得した佃戸との三者の關係が所謂「一田三主制」である。この場合の中間層の成立過程は、地主の徵租權と土地所有權の有償的分割に起點をもつている——いわば上からのコースである。一方、著者が永安縣の資料によりながら、しかし主として理論

的に設定する中間層は、耕作權の高利貸的收奪と蓄積によつて成立したものであり、耕作權の確立と獨立自營農民の成長と農業資本家と農業労働者の分化という「著者によれば、あるべき」下からのコースの發展のゆがみとしてでてきた存在である。この二つの過程は大きく背離する、といわねばならない。（因みに漳州府關係資料による「小税（租）主」の内容は、永安縣文書に頻出する「小租」の所有者のイメージと一致していない）又この原文書が見出された永安縣と同じ延平府屬の南平縣志は、賠主とよばれる中間層的存在が日々、在地の具體的な土地利益の中で佃戸と接し、時として佃戸と協同して土地所有者に對立する事實を伝える（本書Ⅲに引用）。これは、永安縣の原文書で著者が發見した實例——佃權（獨立した物權となつている）の所有者がそれを轉讓するに際し、現在のその地の耕作者である佃戸が立ち合い署名するという——と何らかのかかわりあいがあると思われ、ここには又、前二者とはニユアンスを異にする「中間層」の存在が見出される。以上のように、著者自からが一つのイメージを托して引用した資料と理論設定だけによつても、中間層的人物は、著者が「多様」だと概念的に理解する以上に多様な成立過程と存在形態を現實にもつていたのであり、これらの統一的把握なくしては、著者のいう「中國封建制の内在法則からの説明」もことばのみの提案に終るのではないだろうか。

Ⅳにおいて、私たちは、從來著者が一定の積極的評價を與えて來た資本主義萌芽要素の生成をば、從來の自己の研究成果に一つの新しい視角——歴史發展の原動力としての農民の階級闘争——を加えて、より總括的に評價しようとした意圖を感じることができる。そ

のような態度は、また解放以前の著書、「福建佃農經濟史叢考」を本書に再録するにあつて著者が自己の方法に課した批判（後記参照）、なかならず「階級分析の重要性」の學習によつて得た新しい認識にもとづくものである。「明清交代期の奴變と佃農解放運動は、「その主體たる」奴僕や佃農にとつては起義ごとにみな失敗を以て終りを告げたにもかかわらず、社會經濟の推進に對しては、一様に重大な意義をもつ。清代の乾嘉年間には中國經濟史上における一つの繁榮の時期であるが、當時の中國資本主義萌芽要素の發展は、明代中葉に比べて大きな進歩を示す。それではなぜ、この種の新現象が出現したのか？その推動力の一つは、明清の交代期に不斷に發生した「奴變」と佃農解放運動であり、それが封建統治に打撃を與える上に有効だったのである」という結論に、私たちは、氏のこの勞作に注がれたなみなみなならぬ意欲をうかがうことができよう。事實、著者がここに整理を加えて提示したおびたびしい資料から、私たちは、自己の身分を解放し、自己の勞働の果實を確保し、自己の耕作權を樹立しようとして、合目的なスローガンをかけ有効な組織をつくつてたかつた明清交代期東南中國における直接生産者＝農民たちの生き生きとした具體像に、殆んど最初の經驗として接することができる。それは本書によつて私たちが得た大きな收穫である。（田中正俊氏の勞作「民變・抗租奴變」・筑摩世界の歴史・11は本書に二ヶ月先立つて刊行されている）しかし、私たちは、IVの1において、「十六世紀から十八世紀初期に至るあいだ」を「中國封建經濟史上注目すべき」歴史的段階とした「資本主義萌芽要素の出現」と、それが當代中國の農村社會經濟關係に與えた變化とに關

する、著者の總括的評價を、どのように消化すべきであらうか。著者の叙述を圖式化すると以下のようなになる。

A、紡織工業及び鑛冶工業における資本主義的生産關係の「幼芽」の發生↓都市の手工業とその推動による農村手工業の發展↓封建社會内部の地域的分業の出現↓商品經濟の成長↓工業原料と食糧の需要増大・商品化の深化↓農業經營方式の變化。1、在郷地主と富裕農民による經濟作物・米穀生産における傭工使用。2、山地を佃耕して原料作物を種植し手工業を兼營する新しい型の佃農の大量出現。3、上記商品生産の發達と鄧茂七の起義をはじめとする階級闘争の激化に直面して地主は、封建地代を確保するために經營方式を改變、契約制をもつて佃農の生産への積極性を刺激、ここに宋代から出現していた契約制的租佃關係がはじめて量的に施行される。

4、階級闘争の激化と租佃制の發達↓地主は農民に永佃權を賦與。B、中國資本主義萌芽要素の成長は不均衡（業種と業種。地方と地方。發展した地方の中でも廣大な部分は自然經濟が支配的地位を占める）。農業と手工業の緊密な結合（封建後期には、農業生産内部の多角經營と農業と手工業との相結合した多角經營が出現。しかしこの種分化には限界あり）。封建勢力の壓迫（傳統的主奴生産政策による原料供給の制限。地主階級の工業活動への干渉と破壊。開墾への反對）。これらは、手工業の順調な發展を阻み、資本主義萌芽要素の成長を制約する。

C、商品生産の一定程度の發展と大量の勞働力（農民の相對的な移轉の自由容認による）の存在にもかかわらず、商品經濟と自然經濟の矛盾の中で、封建經濟の發展は一步前進、二歩後退という狀況に

追いつかれ、農民經濟と地主經濟の中に、極端に矛盾し複雑に錯綜した社會關係の新特徴がつくられる。1、郷居地主の高利貸化。2、城居地主のより一層の寄生化（一條鞭法の改革は生産關係に觸れる變革ではなく、地主の寄生化を促進した）↓封建的搾取方法の維持により最大限の地代を獲得、工業原料と米穀の需要に備えて「囤積居寄」をはかり、蓄積された貨幣を高利貸的に投資する。3、このような封建的搾取の強化↓大量の失業農業人口を不斷に造出↓都市における手工業の發展の不充分↓失業農業人口の農村への回流↓租佃關係は惡化、傭工制は野蠻な中世的段階にとどまる。封建政府の徭役と賦税の壓迫によつて豪族大姓に投資する多くの非身分制的小地主と自營農民と、回流の農民とは、商工業の利潤を追求する一部の地主階級によつて、大量に僮奴として使用される。

D、このようにして、より一層強固にされた農村の封建關係が、地主階級の佃農・奴僕に對する身分的束縛と封建的搾取を強化する。

佃農と奴僕が蹶起した必然性を追求していく網羅的な以上の圖式の中で、私たちが最も不滿に思うのは、いくつかの重要な問題の捉え方が、やや現象的個別的であり、同時にそのことが、著者が意圖したはずの歴史的段階の特質規定をきわめて不十分にしていることであろう。たとえば、「農業と手工業の緊密な結合はある程度打ち破られたが、しかしそれには限界があり結局は破られなかつた」というような表現は、問題を不分明な量的差異に還元してう可能性をもつ。中國封建社會では右「結合」と表裏をなす自然經濟の支配についても同様であつて、自然經濟の支配する地域と、資本主義萌芽要素の發展した地域との不均等の存在を指摘するだけでは、あの著

者のいう十六―十八世紀がおかれた歴史的段階の特質はとらえ得ない。著者が結論部分で引用する、雍正七年（一七二九）の賤民解放、順治十七年（一六六〇）、康熙初年、二十年（一六八一）發布の佃戶を奴隸の如く恣意的に役使することへの禁令、乾隆三十五年（一七七〇）、江西寧都縣仁義鄉の碑に記された地主階級の佃戶に對する搾取制限――等々に示されるように、明清交代期の農民戰爭によつて封建的統治が打撃を蒙り、封建的搾取の體系が緩和され、「社會經濟」（著者）はたしかに前進させられたであらう。しかしくりかえすようにこのような成果がアヘン戰爭直前の歴史的段階にどのような連なるものであり、資本主義萌芽要素によつてはぐくまれたとされる新しい前向きの社會關係の展開と帝國主義の侵入を許した中國社會の弱さなどがどのように絡みあつているのか？という點について、私たちはこの圖式から殆んど示唆されることないのである。このような捉え方の缺陷は商品生産發展の波にあらわれつつあつた農村内部における諸關係の展開についても現れる。十六世紀以降、傭工を使用し商品生産に参加していた在郷地主がなぜ高利貸化して行かねばならなかつたのか？（著者の引用する資料自体はその理由の一端を語っているが）一條鞭法の改革が生産關係に涉及するものではなかつたことが城居の不在地主の寄生化を強めたというが、問題は、そのような改革が彼らの寄生化に象徵される社會關係の變化にむしろ對應していつたという側面にこそあるのではないか？その意味では、寄生化そのものの契機は何か？という疑問は依然として残る。ここでは、著者が、一條鞭法云々の次に並列的にかかげる、工業原料と糧食の廣大な市場の成立への地主層の對應の仕方、す

なわち「農民の未解放と生産力の未熟」という状況から必然的に規定されるところの封建的搾取の強化による最大限地代の獲得という点こそ、城居地主の寄生化の鍵として總括されるべきであつたと思われる。さらに宋代以降の契約制的租佃制が、商品經濟の發展と激烈な階級闘争に推進されてこの時代になつてはじめて量的に施行され、同時に永佃權が賦與されて佃農の生産意欲を積極化するという一連の進歩的變化を述べた創見も、著者が他面で強調する地主階級によるその同じ租佃關係の惡化、奴隸使用の復活強化、封建的搾取の深刻化という反動的な方向と切り離されたまま論じられているのである。この反動化に對して「契約」は、「永佃權」は、どのような役割を果たしたのであらう。「奴隸使用」は「租佃制」とどのような關連をもつものであらう。（本文の傍點はすべて評者による）

もう一つの問題は、商品生産の發展が強調されながら、その直接のにない手である農民―佃農・奴僕―とそれとの關連、彼らの市場とのつながりの具體的分析的考察がみられないことである。江西・福建・浙東山區で棚民・麻民・菁民とよばれる農民が商品作物栽培に従事していたという簡単な紹介（福建の山地の藍錠栽培經營における山主―菁主―菁民の關係を地主―農業資本家―農業労働者という資本主義的關係に比定する説明が唯一つの分析的なものであるが、それには疑問が残る）、各地域で商品生産が發達していたという一般的説明、乃至、江南の奴隸は佃農に比して市場との關係が互に密接でかれらの視野もまた廣かつた―というような、ユニークではあるがすこぶる概念的な記述、にとどまつている。「一面では商品生産の搾取を受け、一面では經濟外強制を受け」て農民達は立ち上つたと

いう著者の叙述が、非常に抽象的な段階のものになつて了う所以である。（Ⅱに著者が引く雍正永安縣志の「永邑山多田少、依山者半、皆梯田、……比來佃田者不顧民食、將平洋腴田、種蔗栽烟、利較數倍、一值雨水不調、拖缺田租、貽誤田主」というような資料はⅣでは無視される。しかしこの資料には佃戸と商品市場との緊密な關連が見出される）このような點は、現實の闘争が、「身分の自由を爭取する」「平倉・平穀」「地租増加反對」「土地の再分配と永佃權の爭取」というごとく著者によつていくつかに類型化されつつも、しかも、明清交代期に、なぜ一齊に激しくたたかわれたのかという鑑が、つまり、この期の農民戦争が、何を共通の基盤にしたたかわれたのかという問題が、依然として殘される理由でもあらう。

封建社會における農民の小商品生産の發展を支配階級が強力によつて摘みとらうとするのはきわめて當然のことであり、農民が自己の労働の果實を確保し、自己の生産を擴大していくためには、最後的には、直接生産者としての農民のための政治權力が打ち樹てられねばならないだらう。このような觀點に立てば、中國における新しい生産關係の生長の障害となつてゐるのは、單に個別的な阻止因子や個々の地主による強力の行使のみではなく、地主階級の利益を實現し保障している專制國家の權力形態、そのような政治編制のあり方そのものであると考へられる。

著者の研究は、資本主義萌芽問題を明清交代期の農民闘争の詳細な研究によつて總括的に評價する第一歩であり、私たちの弱點をある程度克服したものであるが、その一層の發展のためには、社會・經濟そのもののより構造的な把握とともに、政治權力のあり方と動

きをも含めた視野が要請されよう。とくに後者は、日本の明清社會經濟史研究が、「社會・經濟」史なるが故に全く無視して來た問題として、今後私たち自身の必須の課題となろう。著者の蒐集された資料には、そのような示唆を與えるものが少くないのである。

[三] VIが私たちに示すものは、明清時代の福建における農民戰爭の概略にとどまらない。そこには、I・IIにおいて原文書上にありありと現われた中國封建社會の顯著な特徴である氏族遺制と高利貸資本の働らき、とくに前者についての重要な示唆がある。著者によれば、福建における多くの「郷族共有地」は、氏族共同體の殘存物でありながら、封建社會の段階では、地方豪族の「捐舍」と高利貸的蓄積方式なしには、殆んどの場合、その設置も擴大も實現せず、かかるが故に共有地本來の歴史的任務は失なわれ、封建的搾取を隱蔽し、封建的支配を維持するための道具となつていた。「福建の民間では多く族を聚めて居り、家ごとに必らず祠があり、祠ごとに必らず田がある。其の他の郷族共有の學田、寺廟、茶田等に至つては、亦た所在に皆有る」という叙述には、おそらく著者の福建における知見と地方志の精讀が背後にあると思われる。さらに著者は、郷を以て單位とし、「郷斗・郷租・郷科」の名稱の根原となつて量器の規格を不統一にしている「郷例」の類の慣行が、もともと氏族制の產物でありながら、中國型封建莊園の「單行法規」の支柱となつており、従つて單に度量衡の側面だけでなく、地權移轉の制限、耕作權の限定（客民の佃耕禁止・入籍の禁止等）、水利の管理、自姓のみの貿易用に設置して他姓の利用を許さぬ墟市（同族市場）の管理、義渡・義路と名付けられた「特權的」商路の開設、米穀の統制にま

で深い影響を與えていたという。このような中國封建制の矛盾を内証させていく特殊な契機の設定と、それを裏づけるべき現象の抉出には、教えられる所すこぶる多いといわねばならない。

しかしながら、この作業も、量器問題闘争という、農民闘争の著者による類型化の内包する意味を私たちに一應肯定させるためには役立つのであるが、そのような「郷例」慣行の支配する特殊な構造をもつた地主制の體系としては、充分理論化されてはいないため、VIの論旨の展開とは無關係に置かれている。もしこの點の追求が進むならば、もつとも大規模な量器問題闘争を展開した、福建寧化留猪坑の「郷民」黃通が、「郷族」たる同姓黃氏の壓迫に憤り、「較桶の説」を倡えて佃客を結集叛亂していつた過程。滿漢地主の殘酷な鎮壓にあつて、黃通自身動搖し、弟の黃允會は清朝に降つて「團練總」となるといふ經過。しかし、その後も起義の策源地留猪坑地帯を、三十年にわたつて維持した農民軍を相繼いで指導したものが黃氏の一族であつたという後日譚。—このような佃農層を抑壓する地主支配を基礎づける同族結合が、それに對抗する佃農自身の革命組織をも基礎づけ、さらに革命主體内部の弱さと強さを生み出した、という見通しすら立てられたのではないかと考える。傅氏の結論によれば、秦漢以後の中國においても封建的社會經濟關係に農奴制の存在を確認することが本論文VIの目的なのであるが、ここに提供された資料は、もはやそれ以上の課題をとく鍵として利用されねばならないだろう。

(森 正夫)